

## 石見銀山街道 概要

石見銀山街道は、戦国期から江戸末期まで、石見銀山で産出された銀を輸送した道である。戦国期は石見銀山から西田の宿場町を經由して温泉津・沖泊へと至る道を使用していた。

「降路坂道」は、石見銀山から降路坂・西田の宿場町を經由して温泉津・沖泊へと至る道である。戦国時代末に毛利氏によって石見が平定された後、主要な港が仁摩の鞆ヶ浦から温泉津・沖泊へと移った際に整備され、銀山で採掘された銀や銀山経営を支える諸物資が往来した。銀山の坂根口から降路坂（標高 429m）までは険しい登り坂だが、坂を下った先は比較的平坦な道が続き、石段や石畳もよく残る。歴史の道百選の名称は降路坂道であるが、世界遺産の構成資産の一つとして温泉津・沖泊道とも呼称されている。

「やなしお道」は当時の道がよく残り、山道を軽減するための土木工事（土橋や九十九折の道の整備）の遺構が見られる。



降路坂道



やなしお道